

Huxley のディストピア

年代正孝

Huxley's Dystopia

Masataka NENDAI

(昭和47年10月26日受理)

<1>

古来イギリスにはユートピア文学が盛んである。その理由を簡単に推論することはできないが、Morton もいっているように、その政治や社会制度に関心の強い国民性が一つの原因となっていることは疑いの余地のないところである。イギリスのユートピア文学は20世紀に入って大きな変容を迫られた。二回の世界大戦とファシズムの勃興とによって19世紀以前の人間の理性と文明の進歩に対する素朴な信頼とは根底から覆えられてしまったからである。かくして、現代においては、もはや昔のような牧歌的な夢物語はその説得力を失ってしまった。科学技術の驚異的發展と人口の爆発による大衆社会の出現とによって、かつてのユートピアは、その延長上にある未来の完全を社会として、むしろ極力その実現も回避すべきものとして描かれるようになったのである。こういう意味でのユートピアはもはや真の意味のユートピアと呼ぶことはできない。それはユートピアを否定するものであって、裏返されたユートピアであり、逆ユートピア、ディストピアと呼ばれている。このような意味でのユートピア文学の転機を画し、従来のオプティミスティックなユートピアの息の根を止めた作品が Huxley の "Brave New World" であって、Orwell の "1989" と並んで現代のディストピア文学の代表的な傑作とされている。

ユートピアは人間だれしもの心の中に潜んでいる理想社会への願望を具象化したものであって、現実の社会における反人間性的な要因を除去し、負の要因を正の方向に逆転したものと描かれるのに対して、ディストピアは現代文明に内在する反人間性的傾向を未来に向かって拡大し、誇張したものと描かれるという点において、相反する要素を持っているのである。いいかえるならば、ユートピアは現実の直接的否定であり、ディストピアは現実の誇張した引き伸ばしによる間接的な現実の否定である。共に現実の否定ではあるが、ディストピアはその表現が間接的であるだけに、そこに諷刺やアイロ

ニーの入り込む余地がそれだけ大きいといえる。とはいっても、ディストピア文学は広い意味でのユートピア文学の一翼を担うものとして、同時代の文明批評をものしユートピア文学の流れの中で共通の convention をもって描かれるという点からは、むしろユートピア文学の対立物というよりは、その一つの variation であるというべきであろう。ユートピアがオプティミスティックであるのに対して、ディストピアはペシミスティックな形でのユートピアであるということもできる。

<2>

一般にユートピア小説は他の形の小説、特に伝統的なリアリズムの小説と較べてどのような特色もっているであろうか。小説というものを構成する要素を、大雑把に三つに分けて、1.) 人物、2.) プロット、或いはストーリー、3.) 背景をなしている時代と社会を考えてみよう。通常の小説では、人物とプロットの重要性が背景に優越しているのに対して、ユートピア小説においては主人公は背景となっている社会そのものである。この点にユートピア小説の特異性が存在する。理想社会の構想そのものが作品のテーマとなっているのである。プロットや登場人物の性格描写は当然二次的な要素となる。

(多くの現代のディストピア小説は主人公のそのディストピアにおける反抗とその挫折の物語である点で共通している。プロットの画一性はそれだけそのプロットの意義が少ないことを示している。Orwell の "1984" においては、そのディストピアたる全体主義社会の構築はさておいても、主人公の反抗のストーリーは Zamyatin の "We" のそれをそっくり借りることによってつくられているという事実はこのことを例証する一つの材料となるであろう。)

この背景となる社会というものについて考えてみると通常の小説においては、それは何らかの意味で現に存在するか、又は、過去に存在した社会であって、多かれ少

なかれ、既知のものであるが、ユートピア小説においては、未来の、従って、未知の社会である。（この地球上に未知の世界があった時代には、空間的な拡がりとしてのユートピアも存在したが、現代では、そういうことはまれである。）従って、ユートピア小説の場合は、その舞台となる社会は全く架空のものであり、ことばの真の意味において fiction であるといつてよい。ユートピア小説の作者にとって、その社会の原理や構造を、万般に互って矛盾撞着することのないように構想し、かつまた、そうすることによって読者に対して、そのユートピアの全体的な vision をはっきりと把握させることが、困難ではあるが不可欠の課題となる。これに答えるには作者の側に、高度の構想力と全体を統合する能力が必要となる。小説の技法という点から考えると、その全体的 vision はストーリーの進展とともに、明らかにされてゆくことが理想なのであるが、登場人物を、その社会のすべての場面に登場させることが不可能である以上、その社会の原理やシステムを補足的に説明を加えることが必要となり、ときにはそれがプロットのスムーズな展開という要請と衝突することになる。（例えば“1984”における小数集産主義に関する論文と巻末に付録として付けられたニュー・スピークの原理に関するノート。また登場人物とそれぞれのユートピアの原理のスポークスマンの役目を果たす人物（“Brave New World”における Mond. “Ape and Essene”における Arch-Vicar）との不当に長々しい対話等。）

このプロットの劇的な展開を、ユートピアの描写という二つの相反する要素をいかに巧みに調和させるかが、ユートピア小説の最大の難問である。今かりに、プロットの劇的な展開と、リアリスティックな性格描写を伝統的な小説の小説的な要素と考へて、これをノベル性と呼びその背景となる社会の描写と、その基本原理の叙述という作者の思想表白的エレメントをエッセイ性と呼ぶとすると、一般的にいって、ユートピア小説は、他の通常の小説に比して、後者のエッセイ性が非常に濃いものになることは容易に想像される。

ところで、ユートピア小説ということばとともに、未来小説、空想科学小説、はたまた S. F. というように、いろいろな内容を示すことばが使われているが、だいたい同じような意味で使われているようである。外国においても、多少事情は異なるが、だいたい同様のことがいえるようである。S. F. が盛んなのはソビエト、アメリカの両国であるが、現代のユートピア文学の古典といわれる二つの代表的作品がともにイギリスのものであり、しかもともにディストピアを描いていることは興味深い。この種の作品は純文学的なものから、通俗的なもの

まで多種多様であるが、その文学性を識別させる要素はその思想性に、いいかえるならば、そのエッセイ性の深さにあるようである。文学的なものにおいては、ユートピアは現代文明に鋭く対立するものとして描かれていてその基本原理、又は主潮が問題であるのに対して、通俗的 S. F. においてはテクノロジーに対する無批判的な追従が見られ、基本的な社会のシステムの vision を提供するというよりは、その現実離れした着想やメロドラマ的な筋立てによって読者を惹きつけようとするものようである。このように純文学的なものにおいてはおのずからユートピアからディストピアに変容する契機を内包しているといえる。

<3>

いままでは、一般的にユートピア小説について考えてきたが、こんどは特にディストピア小説のみについての特質を考えてみる。ディストピアはどんなイメージのものであろうか。すでにのべたように、ディストピアは現代文明の反人間性的な傾向を誇張し、その未来に引延ばした姿を描くことによって、同時代人に警告を發し、反省を促すものであるが、それでは、その現代社会のもつ人類にとってマイナスの要因として何をとりあげるかが問題である。それはその作家の資質、またその生きた時代や社会環境によって異なるのは当然として、逆に作品そのものから共通のものを探ってみる。“1984” “Brave New World” の二つの代表作と、それらに影響を与えたといわれている点で重要な Zamyatin の “We” 等の作品から考えてみると、テクノロジーの進歩と、全体主義への志向、エリートとマスとの乖離、低俗な大衆文化の状況等があげられるであろう。このようにディストピア小説は多くの共通点を持っていることが分る。このことから、ディストピア小説の図式はだいたい決定されてくる。それは次のようなものである。社会のシステムは全体主義のエリートが科学技術をその手段として大衆を操作し、(その操作は “We” “1984” においては主に問題発生後に、いわば事後処理的に処理されるのに対して “Brave New World” においては主に出生前後の一時期に、いわば事前に行なわれている) その主人公たちは画一化した、個性を喪失した人間であって、その体制に対する反逆の意志を失っているか、または反逆の意志を抱いてもそれは強力な支配者によって易々と鎮圧され、反抗は惨めな挫折のうちに終ることになるのが共通のパターンとなっている。ときにはその反逆が成功する場合もあるがそれはそのディストピアの不完全性を示すものであってディストピアの全体的 Vision という見地からは、プロットの結末がどうであるかということは、主要な問題で

はない。このように、もしその現代風なディストピアが完全なものであって、人間をその出生の段階から決定するような社会では反抗は生じないことになる。この場合には、そのような社会には何らの葛藤が生じないわけであるから、小説のプロットは成立しないことになる。従ってディストピア小説を可能にするためにはその舞台となるディストピアは何らかの点で不完全なものでなければならぬ。そして完全なディストピアはもはや小説としては描きえない。他の形式で描くしかない（例えば評論）ということになる。この点で、前述の点と併せて、ディストピア小説は、二重の意味でエッセイ性を濃くする要因を内にはらんでいるといえる。

“1984”の世界では反逆は容易に鎮圧されるが、反逆の意志を持つことは可能であるし、事実、持つ者は多数登場する。しかし“Brave New World”の世界では生前からの生化学的処理や、条件反射教育によって、反逆の意志さえ持ちえない世界となっている。この意味で Brave New World は完全なディストピアであって、葛藤の生ずる余地のない世界である。（もし社会的に不適應の人間が生ずるとすれば、何らかの技術上の操作のミスによる場合だけである。）従って、このディストピアの舞台の中で、何らかのプロットを生み出すためには、特別な工夫が必要となるこうして、いわば体制の外からの人間として、John が登場してくることになる。（しかし、実際には、登場人物はすべて程度の差はあれ、このディストピアには完全には順応してはいないように見える。その意味では Brave New World の世界はまだ完成への一歩手前にあるということなのだろうか。不適應者であることの明白な Bernard と Helmholtz のみならず、登場人物のすべてが、この Brave New World の住人らしからぬ亀裂を、いいえるならば、現代の我々と同じような個性の断面を示している。支配者である Controller の Mond でさえも、科学の研究のために鳥送りになったかも知れない人間である。）この体制外の人間が主役を演じるということは Huxley のディストピア小説の一つの興味ある特徴であって、“Ape and Essence”の主人公 Dr Poole 氏も、又“Island”の Will Farnaby にしてもしかりである。（もっとも後者の場合は、昔からのユートピア物語における訪問者としての旅人の役を与えられているのだが。）この点に彼のディストピア小説の弱点があるように思われる。“1984”“We”の場合は反逆が体制の中の人間によって行なわれる点と比較すると、どうしてもその印象は弱まらざるを得ない。反逆の必然性や、真実味が少なくなるからである。プロットの構成という見地からみても、“1984”におけるように、主人公がその反逆の意志を抱いた瞬間からその挫折を予知している

という伏線に沿って突き進んでいくという緊迫感に満ちた構成と較べて、“Brave New World”の場合は主人公の登場するのは、ストーリーがその半ばまで進んだ段階なのである。Bernard が社会に対して反抗を示すことを予期していた読者は、肩すかしを食らったように感ずるであろう。（Marx という彼の苗字からも連想されることなのだが。）こうしたわけで、体制外の人間の登場は完全なディストピアを描くことを可能にするための一つの方法なのだが、作品に統一性を持たせるといふ見地からは決して成功しているとはいえない。John の母 Linda が Reservation で行方不明になること自体が Brave New World らしからぬ事件で不自然であるが、この点に Brave New World が小説として成立つ可能性がかかっているのである。やはり完全なディストピアの小説化はそのディストピアが完全であればある程不可能に近いといえるのである。

〈4〉

次にディストピア社会の基調をなすところの科学技術の進歩という面を考えてみる。まずディストピアは、逆説的ユートピアを意味しているのだが、ユートピアということばは、我々の理想とする完全な安定した社会を前提とするものであって、それ以上発展する余地がないものとして描かれてきている。もし発展する余地があるとすれば、そのユートピアは不完全なものであって、真の意味でのユートピアとはいえないからである。テクノロジーが驚異的速度で進歩しているような社会は、必らずその反面に、人間がそれについてゆけないために、何らかの不安定性を内包するものであることは我々の経験の示すところである。従ってテクノロジーの絶え間ない発展と、ユートピアのイメージとは両立し難いものであることは確かである（従来のユートピアはいずれも、安定していて、それゆえに又、静かな社会の姿が描かれていた。）作家はこの対立する要素を巧く調整しなければならない。事実、“Brave New World”においても“1984”においても、科学技術は特定の分野（大衆の支配と操作の分野）を除いては、一般的に進歩は抑制されている。“Brave New World”では、それは人間そのものに関する科学、即ち、生物学、生理学、心理学の三つに限定されている⁽¹⁾。従って物質の科学は抑えられ、機械文明ということばの示すような一般的なテクノロジーは現代とさして変ってはいない。26世紀としては貧弱なものであるといえるであろう。生産技術の進歩も、余暇の増大をもたらして、人間の不満を大きくし、社会の安定を脅かすものとして退けられ、科学はときとして人間の敵ともなるのだということが示されている⁽²⁾。

このように“Brave New World”では社会の安定のために計画的な人間の生産と、思考や感情の管理と操作のための技術を除いては、科学技術は政策的に発展を抑えられている。“1984”においても、この事情は同様であり、New Speak には科学という語は存在していないし、技術の開発は、警察の捜査力と戦争継続のためのものに、限られている。しかも後者は、科学者タイプの人間に、その活動の場を与えるためだけのものである。この二つのディストピアからは機械文明の進歩とはいっても、実は全体主義的支配のための手段としてのテクノロジーだけが発展しているというパターンがみられるのである。(この事情は“*We*”においても大同小異である。その西歴3,000年における画期的事業とされている Integral Spaceship も、現実には実現されてしまっている。) こうして考えてみると、従来“Brave New World”は機械文明の異常な発達に対する諷刺という見方が行なわれているが、簡単にそういえるかは疑問である。

“Brave New World”の成立は、彼の他の作品にそのスケッチが随所に窺がわれるのであって、それらとの関連で考えると、果して彼がこの作品を全面的に諷刺として描いているのか疑問に思われる節がある。その一つはハイアラーキー、即ち社会的階層についてであり、一つは優生学 (eugenics) に関する疑念である。“Brave New World”は Huxley がその生涯に亘っていろいろな点でかかわりを持った作品であるが、その構想は、この作品を書くにあたって始めて生れてきたものではなく、それ以前の諸々の作品、特にエッセイの中に、その生れ出る土壌は充分に培われていたのであった。我々は、“Proper Studies”や“Music at Night”等のエッセイ集の中に“Brave New World”の殆んどすべての面での考察を見出すことができる。それらに現れた彼の考え方はこうである。「社会の問題を考えるにあたって、我々はまず人間の本性の考察から始めなければならない。そしてその結論を前提として社会の考察をしなければならない。民主主義の生みの親となった18世紀の哲学者たちの方法もこれと同じであったが、彼らの論理は正しかったとしても、その前提となる人間性の把握が間違っていた。人間は生れつき平等でもないし、又同じように政治的な動物であるわけでもない。従って彼らの理論は正しくなかったのだが、事実関係は変わっても、理論のほうは一人立ちして、今でも通用している」というのである⁽⁶⁾。従って彼にとって、民主主義や平等という観念は誤りであり、そのような思想に基づいた教育の普及も人間の向上にとっては非力であった⁽⁴⁾。彼は the rule by the best citizens という etymological な意味での aristocracy を唱導しているのである⁽⁶⁾。ところで、かかる

趣旨を述べている彼のエッセイ集“Proper Studies”は作者自身もいっているように、イタリアの経済・社会学者 Vilfred Pareto の大きな影響を受けている。Huxley の初期の作品の批評書“Aldous Huxley”の著者 Henderson は、単にその方法論的な面での影響についてしか言及していないが、論者には実質的にも影響が多かったと思われる。Huxley が読んだのは彼の名著“Trattato di sociologia generale”であるが、Pareto はこの書においてエリートとマスとの断絶の存在を強調し、「民主主義」、「進歩」等の近代的概念を攻撃しているのである⁽⁶⁾。Huxley の“Proper Studies”における主張は、全く Pareto の受け売りであるといってもよい。Huxley はその処女作“Crome Yellow”において支配者たる知識階級、その手先となって働らく行動的な信念を持つ人々、そしてその他の大衆の三つの階層からなる合理国家 (the Rational State) の構想を一登場人物の口をかりて述べている。彼によると、人間はその生得の能力や素質に従って、階級上の地位を決定すべきなのである⁽⁷⁾。(後天的な改良策としての教育については、彼はその効果について懐疑的である。) 彼の思想は、貴族主義であって、大衆が果して文化的な伝統を承継、発展させてゆくことができるだろうかという疑念が核心となっている⁽⁸⁾。

Laski もこうした見地から Huxley を Eliot ともども鋭く批判している。こうして彼の思考の傾向を探ってみると、“Brave New World”のカースト制度そのものは現代社会の諷刺とは云えないのである。彼の場合は世界でも最も階級差、又はその意識の強いといわれている彼の母国の状況に対する考察は全然見られない。この事実は Orwell のこの問題に関する意識の鋭敏さと対照的である。この点に、unpolitical⁽⁹⁾ な作家と政治にまともに直面した作家の相違がある。従って階層社会としての Brave New World が諷刺として描かれているためには Huxley にはあまりにも社会の階層化を肯定しようとする志向が見えるのである。

第二は優生学に関するものであるが、彼は“Music at Night”の中のエッセイにおいて、米たるべき未来の平等国家における自由は、現在の自由とは相い容れない観念となるであろうことを考察し、現在の線に沿った進歩が継続して行なわれるためには、人口の減少と優生学的な配慮が不可欠であるといっている⁽¹⁰⁾。“Brave New World”は生物学的、又は遺伝学的ユートピアともいうべきもので、彼のこの分野に対する関心の強さを物語っている。

Contemporary prophets have visions of future societies founded on the idea of natural equality; they look forward to the re-establishment, on a

much more realistic foundation, of the old hierarchies; they have visions of a ruling aristocracy and of a race slowly improved, not by any improvement in the educational, legal, or physical environment, but by deliberate eugenic breeding. ④

この現代の予言者の姿勢はまさに Huxley のそれに他ならず、彼は生来の不平等に基づいた社会秩序に賛成なのである。彼が反対しているのは、“Brave New World”におけるような非人間的、全体主義的な原理なのであって、優生学的改良そのものに反対しているのではないのである⑤。

こうしてみると“Brave New World”の優生学的方法や、カースト制度そのものを現代文明の諷刺としてみることは、必ずしも正しいとはいえないのではない。機械文明の発達はそのほどでもなく、進歩のいちじるしいのはこの人間の生産という面が中心となっているということを考える時、“Brave New World”は機械文明の発達に対する諷刺としては弱いもののように感じられるのである。

既に述べたように、この作品は前半と後半とでその主人公が入れ替るような印象を与えるのだが、この“Brave New World”のシステムと、それに対する主人公 John 及びその思想的バックとなっている Shakespeare の作品に代表される生の肯定者の哲学 (Life-Worshipper's Creed)⑥ という対立する思想について考えてみると、作者はこの両者は避けることのできない alternative として考えていて、いずれの道も狂気にいたる道として否定されているにも拘らずそれ以外の道は示していない。(そして後に1946年版の序文において、その時点においては、第三の道がありうることを示唆している。)⑦このように、相対立する思想は述べられても、作者自身の積極的な主張を示すものがないということ、これは彼のいわゆる novels of ideas の特色であり、この作品等にもその性格がよく現れている⑧。それだけに全体が一つの批判として終始していて、作者自身のユートピア像は明らかにされていない。

次のディストピア作品“*Ape and Essence*”は進歩とナショナリズムの糾弾に急であって、文学作品としては二流の作とされている。主人公 Poole はこの作品でも体制外からの侵入者であるが、その新しい社会への逃避行も、本人の威勢のよさとは対照的に、無力感を与えるだけである。そこに描かれた社会に対する反抗とは受け取り難いのである。主人公の結末の30ページにおける転向も説得力に乏しく、必然性は感じられない。

死の前年に書かれた“*Island*”は彼の最後の小説だが

これは彼の唯一のユートピア作品であって、“*Brave New World*”を裏返しにしたものである。同様のテクノロジーが用いられているが、その方法は“*Brave New World*”におけるような全体主義的、非人間的なものではなく、人間性に合致したものとなっている。彼によれば、目的は手段を正当化するものではなく、正当な目的の達成は正当な手段によらなければならない⑨。この論法からゆくと、共に正しい目的を実現することを目標としているにしても、手段を誤ったのが“*Brave New World*”であり、正当な手段によったのが“*Island*”であるということになる。しかし、勿論、事はそう単純には片づけられないのであって、“*Island*”においては、“*Brave New World*”におけるような上下支配の関係にあるカースト制は存在していない。そして人間の素質、能力という点に関しても彼の考え方は変化してきているようである。Huxley は Wells のユートピアを批判して、一人の人間が知的な労働と肉体的労働とを交互に行うような制度を一笑に付しているが⑩、(これは彼が“*Brave New World*”を書く動機の遠因となっているのだが)“*Island*”においては、専門化はなるべく避け、自分の適性に真に合っている仕事の外に、多様な体験を持つことを奨励しているのである。“*Island*”は Alpha からなる世界であり、かつて彼の考えていた、aristocracy 擁護の態度は生涯の終りになってやっと否定されたといえる。

<5>

“*Brave New World*”の出版は1932年であるが、Orwell は1946年、Zamyatin の“*We*”の批評に寄せて、この作品をこう批評している。

The atmosphere of the two books is similar, and it is roughly speaking the same kind of society that is being described, though Huxley's book shows less political awareness and is more influenced by recent biological and psychological theories. ⑪

又、この同じ批評の終りの方で、“*Brave New World*”はその全体主義というものの洞察において欠けているものがあるといっているが、Orwell は“1984”の全体主義と“*Brave New World*”の全体主義を同じレベルで見ているのではないだろうか。しかし、この二つの全体主義は同じ次元のものであろうかという疑念が起る。

“1984”の全体主義は、我々が通常使う意味のものであって、いわゆるファシズム、フターニズム等に共通な要素を持ったもののイメージを思い浮かべるところのものである。しかし、“*Brave New World*”の全体主義は

かって歴史上に存在しなかったところの全く新しい形のものであって、従来の意味での全体主義ということばを充てていいのかと疑われるようなタイプの社会である。

“1984”の世界は、反逆者に対する威嚇と処罰の恐さによって成り立っているが⁹⁹，“Brave New World”においては、出生前後の期間の科学的操作によって、人間は完全に決定されてしまうのである。個性は解体し、人間は社会に全き順応性を示し、反社会的行動を取る余地は全くないといっている世界なのである。階層化された人間は常に自分に割り当てられた任務に満足し、幸福だと感じていて、支配や権力への意志は持たなくなっているのである。政治というものは殆んど欠落している社会なのである。従って、Orwellの批評はやや的はずれている感がする。その世界に政治が欠落していることの批判ではなく、そのような世界を創造したこと自体を問題とすべきであったのではないだろうか。Orwellは階層制の存在理由が明白でないといっているが、それは確かにその通りであって、HuxleyはCyprus島における実験によってAlphaのみからなる社会は必然的に崩壊することを例証しているようだが、それは説得的ではない¹⁰⁰。読者は、他のエッセイ等を読まなければ既に述べたような彼の基本的な考え方をすることはできないのである。Huxleyは“Brave New World Revisited”において、“1984”は出版当時は、ナチズム、スターリニズムを目前にした人々にとってもっともらしく見えたかも知れないが、10年後の時点においては自分の作品のほうが勝算がありそうだと述べている¹⁰¹。その他には特に批判はしていない。

最近海外ではHuxleyの全作品が出揃ったことから、彼の作品全体にわたる批評書が相次いで出ている。これらは1920、30年代の彼の作品の批評を主体とするものから脱皮して、多かれ少なかれ、彼の最後の作品“Island”を彼の長い作品歴のしめくくりとしてとらえ、Huxleyを再評価しているようである。Meckierは、“Brave New World”“Ape and Essence”“Island”をUtopian Counterpointとして三部作とみ、各々科学者の、歴史家の、そして社会改良家と宗教家の立場から書かれているとしているが、それも一つの見方であろう。“Island”は彼の唯一のユートピアだが、結末においてそのユートピアが崩壊するということは、ディストピアの永続と同じことであり、作者の絶望的な心情を示しているものである。すでにのべたように“Island”は“Brave New World”の裏返しであり、着想の面では新しいものではなく、創造力の枯渇を示している。Meckierもいのように彼の作品を系統的に読んだ読者にとってそのsynthesisとしての興味を与えるにすぎないであろう¹⁰²。ただこの

作品において注意すべき点は、彼の本来¹⁰³の持ち味である諷刺とアイロニーが影を潜めていることであって、それはかろうじてRaniとMuruganの描写に昔日の名残りが窺えるのみである。又、これは形式の点で古来のユートピアの語り口そのままであって、小説としての性格は殆んどみられず、エッセイそのものといってもよいものである。この二つの点はHuxleyが小説という形式に把われずに自分の信条をストレートに出したともいえるし、又、novelist of ideasの行きつく先の姿としてessayistとしての要素が、novelistとしての要素を完全に凌ぐことになった結果だともいえるであろう。

近年未来に対する関心の高まりは、「未来学」という学問の誕生までもたらしたのだが、その人間性の無視と皮相的なoptimismとは、それに対する反撥をも大きくしているようである。近年のディストピア文学にはこれに対する一つの批判として書かれているということもできるのである。未来に対する関心はあっても、未来社会のあるべき姿についての具体的な提言が殆んどないということ、又、理想社会のイメージについて一致した合意がないということが現代の一つの大きな問題であると思われるのであるが、その意味で“Island”は重要である。人間の思想はその時代や環境に大きく制約されていることは言うを俟たないが、その未来観についても同様であって、ディストピア小説はファシズムやスターリニズムの時代の影響が大きいことは確かである。Gaborはpessimismの時代は“Brave New World”と共に開幕し、“Island”とともにその幕を閉じようとしているといっているが、果してそうであろうか¹⁰⁴。（未来学では新しいユートピアの時代が生れつつあると一般に信じられているようである。）“Island”のユートピアはその結末において崩壊しているのであり、Huxleyは現代文明において、ユートピアの可能性を確信できなかったのだといえる。

註

- | | | |
|-------------|-------------------|-------|
| 1. Huxley. | “Brave New World” | p.x |
| 2. ibid. | | p.184 |
| 3. // | “Proper Studies” | p.11 |
| 4. // | “Music at Night” | p.151 |
| 5. // | “Proper Studies” | p.9 |
| 6. ポットモア | 「エリートと社会」 | 6ページ |
| 7. Huxley. | “Music at Night” | p.152 |
| 8. ダニエル・ベル | 「イデオロギーの終焉」 | 13ページ |
| 9. Atkins. | “Aldous Huxley” | p.179 |
| 10. Huxley. | “Music at Night” | p.130 |

- | | | | | |
|--------------|--|--------|---|-----------------------------|
| 11. ibid | | p.152 | 18. "The Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell" Vol. IV | p.72 |
| 12. Meckier. | "Aldous Huxley" | p.201 | | |
| 13. Huxley | "Do What You Will" | p.294 | 19. Huxley. | "Brave New World Revisited" |
| 14. // | "Brave New World" | p.viii | | p.13 |
| 15. Hoffman. | "Aldous Huxley and the Novel of Ideas" in "Forms of Modern Fiction" ed. by O'Conner. | | 20. // | "Brave New World" |
| | | | 21. // | "Brave New World Revisited" |
| | | | | p.12 |
| 16. Huxley. | "Ends and Means" | p.9 | 22. Meckier. | "Aldous Huxley" |
| | | | | p.203 |
| 17. // | "Proper Studies" | p.281 | 23. デニス・ゲーパー 「未来を発明する」 | 26ページ |